

今月の花

河津桜

中園孝信（撮影・文）



桜が咲いた。写真は河津桜である。うすピンク色のきれいな花である。今年は寒さのせいかわ開花が遅いようだ。これから染井吉野、八重桜、枝垂桜、山桜、富士桜などいろいろな種類の桜を楽しむことができる。『古今和歌集』に在原業平が桜を見て詠んだ歌がある。「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」。在原業平も桜の時期は心が落ち着かなかつたようだ。小野小町が同じく『古今和歌集』で桜を詠んでいる。「花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」。確かに、桜が咲き終わったあと、一つ歳をとったような思いがする。

今月の詩

ゆあさとしお（選・文）

「旅 上」

萩原朔太郎

ふらんすへ行きたしと思へども
ふらんすはあまりに遠し
せめては新しき背広をきて
きままなる旅にいでてみん。
汽車が山道をゆくとき
みづいろの窓によりかかりて
われひとりうれしきことをおもはむ
五月の朝のしのめ
うら若草のもえいづる心まかせに

（萩原朔太郎「純情小曲集」より）

*萩原朔太郎：1886年、群馬県生まれの日本の詩人。

「日本近代詩の父」と呼ばれる。

子どもの発達を、視覚的に見せるために、いくつかの映像を準備している。

「ミツバチのささやき」(1973 スペイン映画、ビクトル・エリセ監督：遊戯期)、「日曜日のピュ」(1992 スウェーデン、ダニエル・ベルイマン監督：学童期)、「マイ・ガール」(1991 アメリカ映画、ハワード・ジープ監督：学童期)、「17歳のカルテ」(1999 アメリカ映画、ジェームズ・マンゴールド監督：青年期)、「エデンの東」(1955 アメリカ映画、エリア・カザン：青年期)など。アメリカの心理学者エリクソン、E.H は、人間の発達を8段階に区分している。成人期以前(5段階)は広義では「子ども」だとも言える。

さて、朔太郎の「旅上」。青年期・思春期の夢と現実との乖離が表現されている。もはや「子ども」のように夢見るだけでは済まず、あこがれながら一方で現実も見えてしまう。それでも、「みづいろの窓」「しのめ(茜色の空)」「うら若草」という言葉が伸びようとする生命力をイメージさせる。仮名がきの書き部分が効果的な詩だ。

I.実践報告1

ウガンダからの報告

宮本宗一郎（在ウガンダ）
（2018年12月12日）

新年おめでとうございます。みなさまお健やかに過ごしのことと思います。

いつも「風の便り」に興味深く、そしてありがたく拝見しております。その際、いつも思うことは、ウガンダ（南アフリカ共和国）の子どもたちの「自己肯定力」の強さについてです。

（食生活、住環境など）大変貧し生活をしている子どもたちが大多数ですが、私たちが強く怒っても、すぐケロリとしており、自己回復力（レジリエンス）も強いように感じます。親の方も、貧乏ですが、明るくバイタリティーがあります。あまりクヨクヨしません。そして、親も子ども声が大いのです。1949年生まれの私の子どもの頃も、今のウガンダの様子に似ていたように思います。

（私の隣の家のおばさんは、よく「米がなくなった、味噌がない」と母に訴えて来て、母はあとでブツブツ言いながら、お米や味噌を貸していました。そのおばさんが、時々「おかずを多く作ったのでどうぞ」ともってきました。

豊かな社会になると、何か人間が精神面でひ弱になってしまうのでしょうか。日本の子どもは全員がケータイをもっていて、テレビゲームPCを自由に使っていると聞きます。ウガンダの子どもには想像も出来ないほどリッチな子どもたちです。しかし、精神面で見たら、どちらが正常なのかと考え込んでしまいます。ウガンダ（キトゥグム）子どもたちの姿と、60年前の私の姿が重なって見えるところもあります。

何か学問的な根拠のない思いつきに等しい駄文を書いてしまいました。お許してください。

ウガンダは例年11月末から、翌年の4月末まで乾期で、その上、1年中最も暑い時期になります。北半球（北緯0度から4度）にあります。気候面ではオーストラリアなどの南半球と同じです。そのため、クリスマスも新年も暑い中なので、中々気分が出ません。（現地の人たちはクリスマスチャンが大多数なので、クリスマスは盛大に祝います）

寒さ厳しき折、どうぞ十分にご自愛なさってお過ごしください。（了）

II.実践報告2

「特別支援教室」巡回相談心理士として

特別支援教室巡回相談心理士 塚本文子

(1)特別支援教室とは

特別支援教室は、発達障害のある子どもたちをはじめとした個別のニーズに対応し、より適切で効果的な教育を行うための制度で、平成28年度4月から東京都内の小学校で本格的に導入された教室である。平成30年度にはすべての小学校に設置され、中学校も順次予定されている。コミュニケーションや特別な学習に困難を抱えた子どもたちが、在籍するクラスから離れて校内の別の教室で巡回指導教員から指導を受けて社会性を身に付け、学力の向上を図っていくことを目標としている。

(2)特別支援教室の特徴

- ①対象—通常学級での学習におおむね参加できる自閉症スペクトラム(A S D)、注意欠陥・多動性障害(ADHD)、学習障害(L D)の児童、又はその傾向のある児童。
- ②指導教員—東京都で採用された教員資格を持つ教師で、各自治体の小学校一校に拠点を置き、おもに3～5名のチームで担当する小学校を巡回する。中には心理士の資格を併せ持つ教員もいるが多くはない。私が担当しているA区の場合は、平成30年度現在拠点戦が三校あり、それぞれ7、8名の指導教員が八校前後の小学校を巡回している。
- ③指導内容—子どもの障害、障害の状態に応じて「ソーシャルスキルトレーニング」や「教科の補充」などがそれぞれに合った方法で行われる。

(3)巡回相談心理士の一日—特別支援教室の実際(A区B小学校の場合)

特別支援教室巡回相談心理士の役割は多岐にわたり、始まったばかりでその成果もまだ不透明なところがあるが、それでも子どもたちが少しでも自信をもって学校生活を送れるように、これからも学校を支える存在でありたいと日々願っている。次にその活動の実際を記す。

< A区の場合 >

A区は東京都東部に位置する下町風情の残る区である。子どもたちは素直で、遊ぶことが大好きな児童が多い。小学校は比較的小規模校が多く、小学生約8千名が24校に在籍している。その中で特別支援教室の対象児童は平成30年度で200名近くいる。一校に15名くらいの対象児童がいる学校もあれば、3名だけの学校もあり様々だ。筆者は15校を巡回し、120名程の児童の行動観察と指導教員や担任への助言を行っている。巡回相談心理士は東京都が臨床発達心理士認定運営機構へ業務委託をし、そこからの派遣という形で小学校を巡回している。一校につき年間40時間勤務という規定があり、平均的には4月、8月を除き月に一日4時間となるが、学校のニーズに合わせて一日8時間、年間5回の学校もあり、40時間をどう割り振るかは学校裁量となる。

< 2つの役割 >

心理士の役割は大きく分けて2つあり、①一つは特別支援教室を見学し、指導内容について指導教員にアドバイスしたり、それを指導教員と共有して今後の指導の方向性を話し合うこと、②もう一つは通常級での対象児童又は対象ではないが気になる児童を観察し、クラスでの担任の対応について助言したり支援の必要性について話し合ったりすることである。ちょっとした助言で担任の表情が明るくなったり、指導方法が整理されたと報告があったりすると嬉しい気持ちになる。いずれも児童にかかわる支援者との連携が不可欠で、協働作業の中で進められていく。

< 相談心理士の1日 >

朝は8時半までに出勤し職員朝会や全校朝会に参加したりする。出勤簿はその都度決められた用紙に捺印し退勤時まで提出することになっている。朝会が終わると、特別支援コーディネーターや特別支援教室専門員(対象児童をクラスで観察したり特別支援教室での指導に使う教材を作成したりする)とその日の心理士のスケジュールについての打ち合わせや、観察する児童の情報共有を行う。私にとっては児童をアセスメントしていく上での貴重な時間である。

< 2時間枠での活動 >

特別支援教室での指導は2時間枠で設定され、例えば一、二時間目にクラスの授業を抜けてくる児童は、一時間目は担当教員と個別の学習をし、二時間目に3、4名の小集団でS S T(ソーシャルスキルトレーニング)を学んでいる。子どもたちはこの時間を楽しみにしており、個別学習では自分の良いところ

をたくさん褒められ、小集団では社会的な場面での言動を振り返り、集団での『振る舞い』を身に付けていく。私は個別指導については教員の児童にかかわり方についてのアドバイスをしたりしている。指導教員の児童へのかかわり方の良さを伝え励ますことも多い。また小集団活動では、司会担当教員に活動の進め方や活動内容について助言や提案を行っている。子どもたちの表情や動き方を観察しながら、活動の狙いが浸透しているかを把握したりする。

<給食時間と昼休み>

給食は職員室や特別支援教室で指導教員や専門員、特別支援コーディネーター(おもに養護教諭)と一緒に、その日の指導の振り返りや対象児童の情報共有を行う場合が多い。また気になる児童の近くで給食を食べながら行動観察を行う場合もある。食事の取り方や友達関係を把握したり、会話の中での言語面での特徴を捉えたりすることができる。昼休みは行動観察をした児童のアセスメントと担任や指導教員への細かい対応についての助言を記録する。事前に担任から「友達と上手くかかわれなくてトラブルが多い。対応はどうしたらいいか」などの相談があり、そのことについて記入する場合もある。記録用紙は管理職やかかわる教員が目を通し学校保管となる。また、昼休みを利用して直に担任と情報交換し、児童理解を深めたりすることもある。

<その他の業務>

時には勤務時間を午後に調整して、校内委員会や生活指導全体会に出席し、校内の支援が必要な児童について話し合ったり、特別支援教育の啓発を行ったりする。要請により、保護者との面談で家庭のかかわり方を共有していくことも増えてきている。

<おわりに>

子どもたちへのチーム援助の一環として始められた「特別支援教室」巡回相談心理士の役割ではあるが、子どもたちを取り巻く支援者をサポートする意味も大きいと感じている。これからも子どもたちが様々なことを学ぶ学校で、子どもたちの良さを引き出し、先生たちの日々の頑張りを応援していきたいと思っている。(了)

Ⅲ 子ども研究ノート

遊び集団を通じた子どもの社会性の成長

杉森伸吉 (東京学芸大学教授)

○遊びの重要性

日本の幼児教育においては、以前より遊びの意義が十分に強調されてきていた。たとえば、中教審の幼児教育部局における資料(中央教育審議会、2004)でも、「①幼児の遊びとは、自ら発意して自ら達成する活動。幼児教育とは、幼児自らが環境(人的、物的、空間的)に触発されて自らある意図を持ちそれを実現する活動。環境に幼児の発達や人間形成の要素が内包されている。②課題の自覚に基づく意識的働きかけと子どもの自主的選択的行為の保障ということの統一、特に個の課題の自覚と集団性の統一が必要である。③幼児の自発性の発揮にいいタイミングで支援し、お節介にならない程度に関与し自己達成感を残す。④幼児を園庭に出せば遊び始めるというものではない。遊びの常設の拠点を用意することで幼児の集団的遊び活動の展開が図られる。更に、別々の遊びをしている幼児同士にそれぞれの遊びについて「みるーみられる」関係が成立することにより持続的展開が図られる。⑤関わり重視の母性型保育は我が国の特徴であったが、たとえばフランスでは子どもを他者として観察するのが通常のあり方

である。子ども全体としては他者として見、必要に応じて個別に関わるという両方が必要であると思う。⑥幼児教育における意識性や、大人の作為を気づかせないで子どもを学ばせる工夫の必要性が高まっており、そのためには教育者の相当の力量が必要となっている。その専門性をどう身に着けさせるかが課題。」という見解も示されている。

いっぽう、教科教育が始まる小学校以上では、遊びの重要性が強調される比重が減少していると言えるだろう。しかし、小学校以上でも、異年齢による遊びによる効用として次のようなことを期待することができる。①自分から興味を持ち行動する自発性を持つ（冒険心、探究心、行動意欲の涵養）、②他人との関わりを学ぶ（思いやりの心、協調性の涵養）、③適応能力を育てる（我慢する心、頑張る心の涵養）、④生活する知恵が身につく（知識、技能、ルール、モラルを守る心の涵養）。

遊びから得られるものとして、さらに次のようなことも期待できるだろう。①教室での活動とは異なる、より直接的でダイナミックな関わりを通じて、知らず知らずに子どものステータス（仲間内での地位）や偏見をぬぐいさること、②友達との触れ合いの中で共感的な仲間意識が育つこと、③新たな探索活動や仲間との関わりを経験することを通じて、いろいろな事に気付き、目覚め、新しい発見が生まれること、④自由で自発的な活動を通じて、一人一人の個性が発揮でき、自分の能力を最大限に伸ばすことができること。

○集団遊び不足の問題

しかし、今日の大きな問題のひとつは、子どもの遊びの様態が以前に比較して変化してきていることである。たとえば遊びの様態については、屋外から屋内へ、自然環境から都市環境へ、自然な素材を用いたものから人工的素材を用いた遊びへ、異年齢仲間による遊びから同年齢仲間による遊びへの変化が見られるとともに、遊びの集団性は減少し、テレビゲームに代表されるような一人遊びも増加している。さらに、体を使った活動的な遊びから休息的な遊びへ、生活に根ざした遊びからレクリエーションを主体とした遊びへの変化も見られる。

東京などの大都市よりも自然が多い長野県の地方都市のある小学校の5年生の子どもたちが、学校の終わった後、どのような時間の過ごし方をしているかを調べた。友達と遊ぶことはあっても、一緒にテレビゲームをするという場合も多かった。集団での遊びは少なく、多くは一人での行動や勉強である。

<生活学校の試み>

①目的と概要

日本社会でも、子どもの勉強時間を多くとりすぎて、仲間との遊びを通じた社会性の発達が不十分であるという批判を受け、体験活動などを重視するように学校での勉強時間を減らしてきたが、そのことは逆に子どもの学力低下問題を引き起こした。学力低下問題では、限られた授業時数を勉強に充てるのか、総合的学習や体験活動に充てるのか、という二者択一的な「時間の取り合い」という枠組みで語られることが多い。しかし、学力が培うのがいわゆる知能指数（IQ）であるとする、仲間との集団体験活動などが培うのは、「心の知能指数」（EQといわれる）であり、人間形成上はIQもEQもどちらも大切であり、二者択一的な問題ではなく両立を図ることがきわめて重要なのである。そこで、国立信州高遠少年自然の家（森田勇造所長：当時）では、2004年の下旬に、学校の勉強と体験活動や集団遊びを両立させるための初の試みとして、クラスの子どもたちが通常の授業を受けながら共同生活する「生活学校」の試行をした。この「生活学校」には、長野県の、山村過疎部の小学校4年生、都市部の小学校5年生が1クラスずつ（前者が16名、後者が31名）、別々の時期に参加し、長野県の国立信州高遠少年自然の家で5日間共同生活した。昼は通常の授業を担当が行い、放課後は専門職員の保護の元に、夕方まで自由に遊んだ。

参加した児童たちの特徴として、周囲に遊べる土地や自然があっても、テレビゲームなどでの一人遊

びも多く、クラスの友人と一緒に遊ぶ経験がほとんど無いことがあげられる。

いずれの学級でも、はじめは、普段一緒に3人くらいで遊んでいたのが、一緒に遊ぶうちに、クラス全体で、工夫して遊ぶようになった。

子どもたちはふだんは気の合う3名程度の仲間と集団遊びをすることはあっても、クラス全体で、しかも2時間あまり遊ぶという経験を持っていないようであった。通常に比べて仲間とたくさん遊べたという

②子どもたちの自発的遊びの種類

生活学校での子どもたちが自発的に行った遊びの種類（自然と関わる遊び、ルール遊び、体を使った遊び）と数は、次に述べるように非常に豊富であった（図1～図3）。

生活学校の中で、子どもたちが自発的に行った、自然と関わる遊びについても調べた。森や自然の探索、イモリや魚とり、沢遊び、グリーンアドベンチャー、木登り、トンボや虫取り、チャボ（にわとり）を追いかける、イモリバトル、笹舟流し、キノコ採り、などが見られた（図1）。

子どもたちが自発的におこなった、「ルールを使った遊び」の種類も調べた。ケイドロ遊び（刑事役と泥棒役に別れた追いかけっこ）、ポコペン遊び（一種の缶蹴り）、かくれんぼ、鬼ごっこ、トランプやウノ、草でのしっぽとり、軍手を丸めてサッカー、じゃんけん陣取り、木の棒投げ競争、木の枝でのチャンバラ、などが見られた。自然にあるものも、うまく使っていることが分かった（図2）。

また、体を使った遊びの例である。取っ組み合い、追いかけっこ、足踏みジャンプ、肩ぐるま、騎馬戦、などがあった（図3）。

(1)自然とかかわる遊び

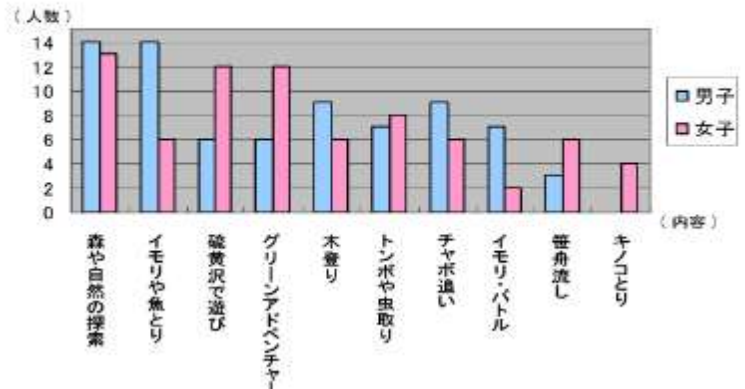


図1 4日間の「自由な時間」で行われた「自然とかかわる遊び」

(2)ルール遊び

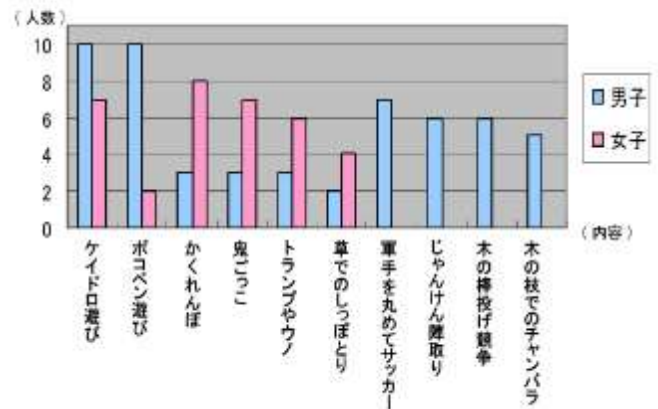


図2 4日間の「自由な時間」で行われた「ルール遊び」

(3)体を使った遊び

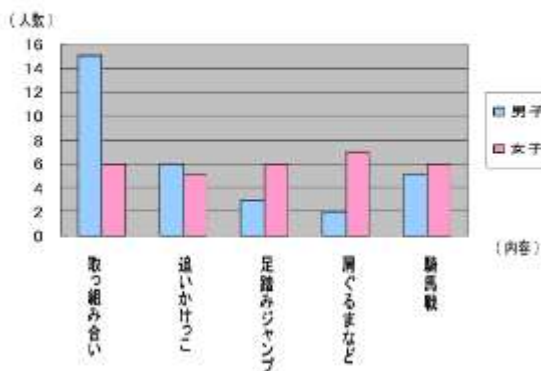


図3 4日間の「自由な時間」で行われた「体を使った遊び」

○遊びを通じた集団の変化

生活学校に参加した小学4年生のクラスが、はじめは男女別に小さな集団で遊んでいたのに、次第に男女一緒に、大きな集団で遊ぶようになった様子がみられた(図4)。体育の授業で習った馬跳びや缶けりを皆で行うようになっていったものである。1日目は男子8人集団に女子が一人混じった9人集団と、女子の3人集団がひとつ、女子の2人集団が二つであった。2日目は1日目の9人集団はそのまま、その他の女子全員がひとつの集団になった。3日目は男子6人と女子7人からなる13人集団と、男子2人集団と大きくなり、4日目には全員で遊んでいた。

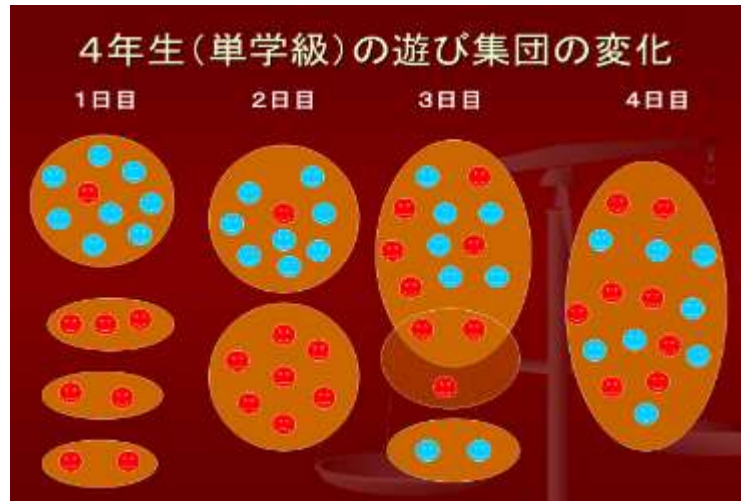


図4 単学級の4年生の4日間での遊び集団の構成の変化

5年生の学級でも同様に、第1日目から第3日目には同性間の遊びが多く、両性の混合集団で遊ぶ子どもは約3割にすぎなかったが、4日目には全員で広場などでルール遊びをして遊んでいた。

○自由な時間の過ごし方

生活学校が終わった後で、自由な時間の過ごし方として、自分の気に入ったものとの回答を検討した。生き物との関わりや、広場で全員で遊んだこと、自然の中を探索したこと、体を使った遊びなどが楽しかったようである。

○ソーシャルサポートの変化

小学5年生のクラスを対象にしたソーシャルサポートについて調べたところ、遊びや共同生活を通じて、クラスの仲間作りができると、助け合い(助けたり助けられたり)などのソーシャルサポートが高まることを示している(図5)。青線は、「自分が友達に与えたサポートの大きさ」(14項目、各4点満点)の平均を示し、ピンク色の線は「友達が自分に与えてくれたサポートの大きさ」(5項目、各4点満点)の平均を示している。ソーシャルサポートが日をおって上昇するとともに、友人から「受け」たサポートよりも、「与え」られたサポートを大きく認識していることが分かる。幼なじみが少なく人数も多いので、5日の間での変化の余地も大きかったと思われる。

ソーシャルサポート
・日をおって上昇、「受け」より「与え」を多く認識。

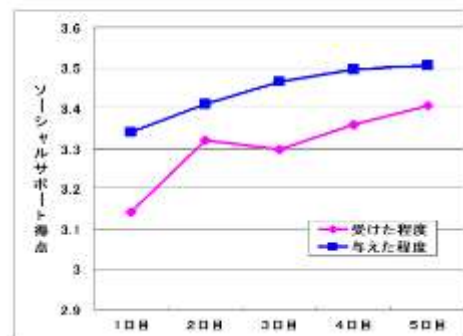


図5 生活学校を通じた5年生の学級でのソーシャルサポートの変化

○新たに気づいた友人の側面

普通の学級活動に加え、普段行わない集団宿泊や集団遊びを行うことにより、友人の新たな面が見えた可能性が考えられたので、新たに気づいた友人の側面についても尋ねた。

自分が友達に何かしてあげた回数を検討した結果、日をおって上昇していることが分かり、ソーシャルサポートの結果と一致した。さらに、男女別に、新たにどのような友達の面に気づいたか、その種類と頻度を検討した。女子は男子について、「頼りになる」と思ったときに新たな面に気づいたと思い、女子同士は「気づかい・思いやり」、「仲間に誘ってくれた」など、同性集団の中に入れてくれたりしたときに、新たな面に気づいたと思う傾向が見られた。また、男子同士は、「やさしい」「明るい」「いつもより話した」ときに、新たな面に気づいたと思うようである。

また、「仲間がしてくれたこと」についてもたずねたところ、男子間では「遊びへの誘い」が多く、同性間では「ものやフォローをくれた」「手伝ってくれた」が多く、男子は女子が「ものやフォローをくれた」、女子は男子が「手伝ってくれた」が多かった。

<おわりに>

テレビゲームやテレビなどが無く、仲間と自然の中で宿泊体験することにより、昔の子どもたちが遊んでいたような伝承遊びを、子どもたちが自ら考え出す傾向が見られた。

クラスの友人たちと一緒に生活し、遊ぶ経験を通じて、遊び仲間の範囲が拡大するとともに、集団としてのまとまりが向上した。

遊びを通じて、今まで気づけなかった友人の、さまざまな面に気づくことができ、助け合いの心も高まったといえよう。(了)

<引用・参考文献>

文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会(2004) 第5回幼児教育部会配布資料1
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/008/04011401/001.ht)

IV 子どものこころQ&A

熊澤幸子（昭和女子大学名誉教授）

Q 祖母の差別用語で傷ついています（中1女子）

私は中学1年生で、私立の女子一貫校の生徒です。私のおばあちゃんは、やさしくていい人なのですが、私に「あなたは女の子なのだから、自分が食べたものは洗ってね」と言います。私には大学生、高校生の兄がいますが、兄には、そのようなことばは言いません。何かにつけて、「あなたは女の子なのだから」という言い方が、すごくいやです。もうその言い方はやめてほしいのですが、おばあちゃんに、何と言ったらいいのでしょうか。おばあちゃんは、私たちの家族とは別に住んでいるのです。（電車で20分の所です）母が病気で入院中なので、手伝いに来てくれていて、かんしゃ（感謝）していますが、ケンカはしたくありません。おばあちゃんとい関係でやっていきたいです。何かいい方法がありますか。（かおり）

A 入院中のお母さんのかわりにお手伝いに来てくれるおばあちゃんに、とても感謝（かんしゃ）しているかおりちゃん。「ありがとう」の気持ちを伝えることをまず言って、その次に自分の気持ちを話してみることがいいと思います。お兄さんたちにも、おばあちゃんに感謝（かんしゃ）の気持ちをつたえることをおねがいしてほしいのです。

おばあちゃんは、若い時代に「性別・役割分担」（男らしさ、女らしさのしつけ）があった人なので、そう言われるのだと思いますが、あなたのしょうらいを思って、言われている面もあるのでしょうか。おばあちゃんが育ってきた時代は、「女性は家事、男性は仕事」と男女の役割が分かれていた時代でしたから。

「今は学校や家庭でも、女の子も男の子も差別（さべつ）しないで、同じなの」と話してみてもいいでしょうか。

もう1つの言い方は「あなたは女の子なのだから」と「何でいつもそう言うの？」とおばあちゃんの気持ちをていねいに聞いてみることに。その上で自分の考えを話すのもいいと思います。おばあちゃんは、大好きなあなたのいうことを、きっと分かってくださると思います。

たとえば「今の時代は、家事を家族みんなで分担する時代なのよ。だからお兄ちゃんにも家事を頼んでね」「お兄ちゃんにも話しておくわ。しょうらいお兄ちゃんが、けっこんしてから困らないために必要だと思うから・・・」「今は夫も妻も同じように外で働く時代だから、男の人（旦那さん）は、家で女の人（奥さん）よりも、家事ができないとやっていけない時代だと、先生が言われるの。だから、男の子も女の子も家庭科を勉強しているし、クラスの男の子は、女の子より家庭科の時間が好きな子もたくさんいるのよ」「これからは私も家でもっとお手伝いします。だから、『あなたは女の子なのだから』って言わないでほしいの。これからは、うちでも家族みんなでやるようにするからね・・・」と。

おばあちゃんとケンカはしたくない、という気持ちはとても大切。

お兄ちゃんたちにも協力（きょうりょく）してもらって、行動（こうどう）でおばあちゃんに分かってもらえるようにがんばるのはどうかしら。そうすれば「あなたは女の子なのだから」と言わなくなるし、あなたとおばあちゃんだけでなく、お兄ちゃんたちやお父さんも、今まで以上におばあちゃんを大好きな「なかよしの家族」になっていくと思うの。

V 子ども問題の本棚から

1. マリー・ウイン「子ども時代を失った子どもたち」1981（平賀悦子訳・サイマル出版、1984）

深谷昌志

○10代は「狼人間」？

アメリカの女性ジャーナリスト、マリー・ウインが多くの親子を対象とした聞き取り調査をもとに、アメリカの子どもの危機を「子ども時代を失った子どもたち」(Children without Childhood, 1981年)として問題提起をしたのが本書である。

ウインは、思春期に入ると、無邪気で可愛らしかった子が「不躰で、粗野で、利己的で、横柄」な「手に負えない下宿人」になってしまう。「9-15歳の子どもたちの34.9%の者がセックスに積極的」というデータが示すように、10代になると、多くの子がセックスにふけるようになり、麻薬に手を出す子も増える。そうした子ども状況を誇張するようなテレビ番組が流れる。そうした状況の中で、大人の権威をからかい、無遠慮で、時には爆発する子どもが増加する。となると、親たちは『10代は狼人間』という神話に怯える日々を過ごす。

ウインは、こうした子どもの変容の背景に親、特に母親の生活様式の変容があったと指摘する。「就学前の子どもを持つ母親」の就労率は「1950年の12%から1980年には45%までに」増加した。それと同時に、女性は「自分を犠牲にしてまで育児という重責を一人で背負いこもうとしなくなった」。その結果として、「母親が家庭にいたころに比べれば、子どもの世話も監督も行き届かなくなるのが当然であろう」と結論づけている。

○家事・育児の生活への疑念

ウインが提起した母親たちの意識変化は、1960年代のアメリカの女性問題の高まりを背景としているので、若干の補足を行っておこう。

ベティ・フリーダンの『新しい女性の創造 The Feminine Mystique 1963年。三浦富美子訳、大和書房、1965年』（原題は「女性性の神秘さ」あるいは、「女性性の謎」で、書名は適正を欠く感じがする）がアメリカの女性の生き方に大きな影響を及ぼしたといわれる。白人のフリーのジャーナリストで、3人の子の母であるベティの「豊かな社会アメリカの中流階層の主婦たちが、女性らしさを賛美するわなにかかって、家事を職業と考えたなら、空虚さしか残ない」という指摘は、中間層の白人を中心としたアメリカの女性に衝撃を与えた。きれいに片付いた家庭、庭に白いブランコ。そして、可愛い子ども。勤勉でやさしい夫を支える身ぎれいな妻。そうした家庭像は幻想で、自分のものは何もないとベティはいう。そして、白人の中流階層の女性を中心に、自分らしさを取り戻そうとする運動が広まり、1965年にベティは全米女性機構(National Organization for Women, NOW)を組織している。

なお、キング牧師の呼びかけで、いわゆるワシントン大行進が行われたのは1963年8月28日だった。そうした公民権運動と同時に、学生運動を象徴するバークレー闘争は1964年末にピークを迎えている。また、「いちご白書」で有名なコロンビア大学の学生紛争も1968年にピークを迎えている。

このように1960年中頃のアメリカは、社会的な弱者が主体性を取り戻そうという動きが高揚した時期で、ベティの動きもそうした主体性の主張する女性版と見ると理解しやすい。なお、ベティは、15年後の1981年に『セカンド・ステージ』（1981年、下村満子訳、集英社、1984年）を著して、女性の社会参加が女性を幸福にするとはいえない。家庭でも夫と妻とが相互に尊重することが大事だと軌道修正を行っている。

○家庭の基盤が揺らぐ

ウインの本に戻ろう。アメリカの子どもにとって、母親の社会参加以上に強い影響を与えたのは両親の離婚だという。「1950年まで、子どものいる家庭の離婚はまだまだ比較的珍しいことであったが、1982年になると2組に1組は離婚する事態となった」。そうした離婚の増加の背景に「女性にも経済的に自立する道が開かれ、選択権が与えられ」、我慢をしない女性が増え、その結果、「離婚して母親が親権者となった家庭は、1970年には95万6千世帯だったが、1981年には270万世帯に増えた」という。

離婚というと、ダスティン・ホフマンとメリル・ストリープの好演が印象的な「クレマー、クレマー」（1979年）を思い起こす。母親・ジョアンナが自分の生きがいとなる仕事を見つけないといい残して、家を出てしまったので、5歳のビリーは父親テッドと慣れない二人だけの生活を始める。仕事人間だったテッドはビリーのためにフレンチトースト一つ作れない父親だった。慣れない父親業にテッドは仕事で失敗を繰り返し、職場を解雇されるが、父親としてはビリーと円満な関係を結べるようになる。1年半後、仕事を見つけたジョアンナが養育権を取り戻すための裁判を始める。

ビリーの例が示すように、親の離婚は子どもから安定した生活の場を奪うことになる。「クレマー、クレマー」ほど有名ではないが、「マイ・スイート・ファミリー」（1991年）は、13歳で家出をしたローラを家族全員で探すストーリーだが、母親のメリンダは2度離婚し、現在、連れ子3人のいる父親、キースと3度目の結婚をして、二人の間に8歳のサムが生まれている。メリンダと別れた父親、ディビットも、その後、再婚、離婚を繰り返し、3度目の妻との間に娘がいるが、現在、離婚話が進み、別の女性が出産間近の状況という家族構成である。ローラからすると、実親との間では一人っ子だが、父の違う弟と母の違う妹、それに、同居している血のつながらないきょうだい3人がいるので、彼女は一人っ子とも、3人きょうだいとも、6人きょうだいともいえる家族構成で、父的な存在は3人、母的な人も4人という13人の複雑な家族構成である。

アメリカで子ども調査をしている時にサンフランシスコ州立大学の教員7人と親しくなった。親睦会の折りの話では、離婚歴ナシは一人だけで、再婚が4名、3度目と4度目が各1名だった。そして、彼らは次週の土曜に女性教員の出産パーティに出席する予定と聞いた。彼女は同性愛者で、3年前に養子縁組で子どもを引き取ったが、今回は人工授精での出産だという。話を聞きながら、複雑な家庭環境は映画の話でなく、現実の世界なのだと感じた。

○子どもの状況は中世に戻った

もう一度、ウインの世界に立ち戻ると、ウインは、子どもは「大人とは質的になったく違う特別な時期があつてこそ、親が期待する素直さ、ういういしさ、快活さという子どもの特性が失われぬ」。それだけに、子どもとしての時を持たせることが大事だが、「幼児期の子どもは、生理学上も、認識、情緒、知覚など、まるで大人とは別人種のように見える」。そして、「3.4.5歳の子どもたちは、神秘的で、驚きに満ちた未知の世界に住んでいる」。その後、「6.7歳になると、子どもの思考は決定的な転換期を迎える」。それは、「自分が宇宙の中心なのではなく、自分の外部に別の世界があるのに気づく」過程だという。

しかし、近年、子どものそうした成長の過程を無視して、「子どもと大人のギャップを小さくし、子どもをもっと大人と平等に扱う」親が増加している。これは、子どもから子どもとしての時を奪う行為だという。

ウインは、フィリップ・アリエスが『<子供>の誕生』（1960年、杉山光信・杉山美恵子訳・みすず書房、1980年）を引用しながら、中世の子どもは、物心がつくと働きに出され、子どもとして

の時を持てなかった。しかし、子どもに教育する時間が必要となり、その時間を使って、家で親が子どもを保護する慣習が定着し、子どもも子どもとしての時を持てるようになった。しかし、「中世同様に今日も、大多数の子どもたちが大切な親子のきずなを幼い内に断ち切られている。ただ、今では、中世のように親が子どもを家庭から追い出してしまうのではなく、逆に別居、離婚、仕事などのために親の方が家庭からでていってしまう」。その結果、子どもは子どもとしての時を持てず、「子ども時代の終わりを意味する」という。

もちろん、「女性解放運動のおかげで、女性は人間として成熟し、独立した」。その流れを大事にしたいが、その結果、子どもが安定した居場所を失った。だからといって、事態を昔に戻すのは現実的ではない。しかし、「社会の流れを修正し、家庭がもっとうまくやっていたらいい」というくらいはできる。それだけに、これからの親、とくに母親は、自分の自己実現と、子どもの子どものとしての時の確保との両立に知恵を発揮してほしいという。

○「女性活躍社会」への疑念

ウインが懸念しているのは1960年代後半から70年代前半、今から半世紀前のアメリカの子ども事情である。そして、母親が社会参加したのはいいが、子どもが子どもとしての時を持てずに放置されている状況は中世の社会を思わせる、という指摘に衝撃を覚える。

「すべての女性が輝く社会づくり」のスローガンのもとに、日本でも、2016年4月に「女性活躍推進法」が設定された。皮肉をいえば、人手不足を外国籍労働者でカバーするにせよ、賃金が相対的に低い誠実な女性の力を借りて乗り切りたい、という為政者感覚の施策であろう。国のおもわくが表面に出ているので、女性、特に母親の立場への配慮が乏しい。保育所という箱モノを作れば、育児の問題は解決するかなのような安易な政策である。

リヤカー的な車に数人の子を乗せて散歩に出る。その姿に子ども虐待を連想するのは筆者だけだろうか。保育士たちの努力を多としたいが、保育所の現状は子どもが快適に過ごす場とは程遠い収容施設であろう

日本の土着の育児文化に「ツがつく内は神の子」があった。民俗学者・大藤ゆきの「児やらひ」によれば、数えの9つまでは神から授かった大事な子で、そこまでは慈しみ、10歳になったら、社会に出るように「児をやらう（子を家から追い出す）」文化の面を持っていたと指摘している。この育児観は現代にも十分に通用する。ツがつくまでは、安定した環境で子どもを育てるべきではなかろうか。

北欧に調査に出かけてゼロ歳児保育の話をした時、「それは児童虐待にあたる」と激しく抗議された。2歳位までは家庭保育が原則で、その後も就学までは子どもは家庭を居場所とする。そして母親だけでなく、父親も一定期間休職して、子育てに関わる。人生の中の何年間かを「親の育児期」とする仕組みである。長い人生なのだから、数年間を子どもの養育に時間を割く文化である。北欧では、大臣や市長が休職して、育児をしている姿がある。

これだけ情報が国際化している現在、どうして北欧での試みが日本に導入されないのかと疑念を抱く。子育てが一段落したら、大学での学習を無償化して、リフレッシュしてもらおう。そうすれば、その後の30年近い歳月を社会で活躍できる。親と子とが幸せに暮らせる設計が可能だけに、女性を労働力としか見ない日本の現状が、残念でならない。(了)

<KARUIZAWA TODAY>



春霞の浅間山
ふと空を見上げると
大きなコブシの大木が目に入りました。
すーっと伸びた枝の先に
たくさんの芽を見つけました。
それは春を待つ芽のようでした。

細江久美子（在軽井沢）

<自己紹介>（到着順）

○宮沢 長（千葉市立轟町小学校）

千葉市の小学校で働いている宮澤 長（みやざわ たける）です。今回、千葉大学の土田雄一先生に紹介していただき、日本子ども支援学会に入会させていただきました。

私は、学生の頃からチームビルディング、カウンセリング、ファシリテーションなど、学びや成長、気づきを促す心の教育や体験学習に興味があります。自分が「おもしろそう！」と感じた学びの場に行き、いろいろな人と一緒に活動したり、話をしたりすると、自分の世界が広がるのを感じます。だから、子ども支援学会でたくさんの人と出会い、一緒に学ぶことができるのを楽しみにしています。

現在、私は千葉大学の教職大学院に在籍していて、レジリエンスや道徳教育について学んでいます。世界規模で見ても、自分の家庭規模で見ても、身の回りには大変なことがたくさんあります。でも、きっとそれを乗り越える力を私たちは持っていたり、身に付けたりすることができると思っています。自分や関わる子どもたちのレジリエンスを高めていきたいと、強く思う今日この頃です。

○田中菜穂子（育英幼稚園）

このたび新しく、子ども支援学会に入らせていただきました田中菜穂子です。目黒区の育英幼稚園に勤務し、結婚や出産のたびに退職、復職を繰り返し、それを受け入れて下さる環境に甘えながら今年で19年目になります。

日々子どもたちと、また保護者の方々と接する中で、現在の教育に沿った支援ができていないか常に模索し、反省と探究を繰り返す続け、今ではそれがライフワークのようにも感じています。私が新任だった頃と現在で、子どもを取り巻く環境は大きく変わったように感じています。まずSNSの発展で、子育てに関する情報が過多になり、保護者はより情報を取捨選択しなければならず、正しい情報が得にくくなったように思います。私自身中学生と高校生の母親として子育て

に悩み、インターネットに頼ったことも一度や二度ではありませんし、結果更に悩みが深くなることも経験しています。様々な情報があふれる時代の中で、これから成長していく親子に今できることはなにか、皆様の中で学びの時を持ちたいと熱望しております。若輩者ではありますが、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

○内山絢子（前目白大学）

今から3年余り前、2015年の春に科学警察研究所の34年、目白大学の13年を経て退職をした私に、和子先生から、「これからはフリーランスね」と声をかけられました。和子先生にそう言って頂いたのと、フリーランスの言葉の響きがよかったので、その意味もあまりよくわからないままうなずいていました。

研究職中は、その職場のメリットを十分に生かして、犯罪者・犯罪被害者・非行少年等の一次的なデータが入手可能で、非行の原因・背景や被害者支援などについての調査研究ができました。しかしながら今、改めて「フリーランス」の意味を調べてみたら、特定の企業や団体・組織に専従しておらず、自分の技能を提供することにより社会的に独立した個人事業主であるとあります。日本語では「自由業」と呼ばれ、その例として、医師、弁護士などがあげられています（Wikipedia）。ということは、前半部分はともかく、社会に貢献できる技能など持ち併せず、ひたすら組織に属することでそのメリットを享受していた私は、フリーランサーとは言えません。今やただのおばさんです。しかし、それ以下にならないために、少しばかりの勉強は継続したいと思います。また、地域の同年齢の人々を見渡すと、料理・裁縫等の技能に優れた普通のおばさんがたくさんいて、この分野では、それら能力未開発の私は、パン作りやケーキ作りに努力しているところです。まだ上手にできませんが、頭がさび付かないように、さまざまなことに挑戦したいと思います。

*補足です：（深谷和子）

2012年～2017年にテレビ朝日で放映された「ドクターx」は、米倉涼子さんの「私、失敗しないので」という名セリフと共に、大変な視聴率だったそうです。巨大病院の中で「(たかが、あんたは)フリーターじゃないか」という男性医師たちの蔑視の中で、「フリーランスです！」と、その都度言い返すドクターxの小気味よさ。どこやらもの悲し気な「フリーター」とは違う、鮮やかなステイタスの出現でした。多くの方は晩年に、それまでの社会的地位を失いますが、でもそれは、既存の組織と役割から解放されて、新しい人生を開いていくことのできる「自由な時期」の到来でしょう。ことばの意味は、時代と共に変わります。辞書に書かれている医師や弁護士とは違う「フリーランス」の出現。お互いに、フリーターではなく、自分の中に積み重ねてきた能力を大切に、「フリーランス」として十分な人生を生きましょう。

○小山田佳代（三鷹ネットワーク大学事務局）

東京都三鷹市にある三鷹ネットワーク大学の事務局職員として、講座のコーディネートをしております。地元では、小金井市社会教育委員の会の議長、また、東京都生涯学習審議会委員も務めています。元々、地元の小金井市で子育て支援活動をしていたことがきっかけで、東京学芸大学の学芸大こども未来プロジェクトに関わり、そのご縁で、教育支援人材を育成するプログラムの開発と資格認証のシステムを構築するという、文科省からの6大学連携研究事業の事務局に3年間携わったことがきっかけとなり、以降10年間、NPO法人東京学芸大こども未来研究所、教育支援人材認証協会を経て、大学の先生方と共に、学校教育内外で教育支援をする人材育成を行ってまいりました。

「地域の子どもは地域で育てる」という言葉に共感を覚え、子どもたちは地域の中で、様々な人たちと関わり、多彩な体験を得て育つことが豊かな成長に結びついていくことを体感し、そのような環境をもっと広くつくっていったらと、微力ではありますが、地道に活動を続けておりま

す。社会教育法が改正され、今後、地域学校協働支援のネットワークを広げていく方向へとさらに進んでおりますので、多くの人たちが子どもを専門的に学べる機会を積極的につくって行きたいと考えています。どうか、学会の皆様にもご協力を頂けたらと思います。今後ともよろしくお願ひいたします。

○松井菊乃（株式会社ワークサポート）

群馬県高崎市にて2003年に個人事業としてワークサポート設立し、2007年に株式会社ワークサポートとなり、現在までに多くの公的機関からの調査業務を請け負っております。

勉強会へも参加させていただいておりますが、このような会への参加はなかなか叶わないため、先生方のお話を拝聴できることがとても嬉しく、また、学ぶことの楽しさや「つながることの嬉しさ」を感じております。ここのところ、私事で参加ができず、こころ苦しい限りですが、日本子ども支援学会の賛助会員となっていることもあり、更に知識を深めるためにも、暖かくなる頃に参加させていただきたいと思っております。

事務所のある地域は、高崎市でも校外にありますので、春夏秋冬を感じながら仕事ができる環境です。現在は事務所の軒下に雀が2羽住み着いています。今年で3年目になりますが、初めは1羽で翌年から2羽となりました。ひなはまだのようですが、今年は期待しつつ暖かく見守っています。

この風の便りの場をお借りまして恐縮ですが、零細企業ではありますが、皆様のお役に立てるよう努めてまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

<句会むさしの>

○潮風や三万体の雛飾り

安田勝彦

顔真卿の筆の躍りし雑木の芽

潮風や・・・は千葉県勝浦市のひな祭りイベントを詠んだものです。潮風の春の訪れとひな祭りの温かさが伝わってくるのでしょうか。顔真卿・・・は、上野国立博物館の名筆の展覧会です。王羲之を越える顔真卿の名筆は、書を知らない私にも迫るものがありました。長蛇の列は、2時間待ち、上野の山は、芽吹き時となっていました。

○春遠しデブリに罪はなけれども

上島 博

東日本大震災からまもなく8年。しかし、福島原発の廃炉作業は様々の困難に阻まれ、遅々として進まない。溶け落ちた燃料デブリに、やっと接触できたのだという。遠隔操作の装置で挟まれたデブリの写真は、もがき苦しむ魔王の顔にも見えた。放射能と分断をまき散らす私を生み出したのは誰だ！という叫びが聞こえてきそう。福島にも日本にも、本当の春はまだ来ない。

○いちご摘み りんごのように頬張る子

三輪ひろ美

入門したての私です。恒例のいちご狩りに行ってきました。見事な大粒で、小さい子が摘むと、それはもう、まるでりんごかトマト！それを俳句にしたいと、いちごの季語を調べてみたら、初夏(〇_く)。じゃあ春の季語にはどんなのがあるかなあと調べてみたら、山笑うを発見！おもしろい！なにこれ！「山」は笑うだけでなく四季で色々してくれるらしいこともわかり、これを使って句を詠みたい気持ちに。

VII イベント情報

第4回ワークショップ (*2/9大雪による延期分)

日時：3月2日(土)(2時から4時)「幼稚園教育の未来」

於：東京駅八重洲口 ルノアール会議室

講師：河村真理子、門脇薫子

司会：斎藤恵子

第5回ワークショップ

日時：5月18日(土)(2時から4時)「小学英語を考える」

於：東京駅八重洲口 ルノアール会議室

講師：滝口 優

司会：吉田佳代

第6回ワークショップ

日時：8月3日(土)(2時から4時)「自己肯定感をめぐって」

於：東京駅八重洲口 ルノアール会議室

講師：明石要一

司会：中山哲志

第7回ワークショップ

日時：11月9日(土)(2時から4時)「子ども問題の本棚から」

於：東京駅八重洲口 ルノアール会議室

講師：深谷昌志

司会：未定

VIII 編集後記

.....(深谷和子；ニューズレター委員会)

「風の便り」3月号をお届けいたします。ウェブ上で会員をつなぐ大事なツールの一つ、季刊の「風の便り」(3で割れる月の初旬発行)は、各種の研究・実践情報をお届けしながら、お互いにエンジョイできる場を用意できればと考えております。とりわけ「巻頭」の「子ども支援実践報告」の欄には、会員の方々から、大小の実践記録をお寄せいただきたいと願っております。皆さまのご自由なご投稿をお待ちしております。

また、会員の自己紹介の欄も、さまざまな分野で活動されている会員の動向を知るニュースとして、どうぞお気軽にご投稿ください。学会ワークショップ(イベント情報参照)でお会いするのを楽しみにしております。
投稿先：kazukofukaya@nifty.com

<編集委員>

深谷和子・中園孝信・湯浅俊夫・上島博・大高志芳・三枝恵子・清文枝・土田雄一・吉野真弓

<「風の便り」第5号目次>

今月の花・今月の詩

中園孝信 ゆあさとしお

I 実践報告1 ウガンダからの報告

宮本宗一郎

II 実践報告2 「特別支援教室」巡回心理士として

塚本文子

III 子ども研究ノート 遊び集団を通じた子どもの社会性の成長

杉森伸吉

IV 子どものこころQ&A

熊澤幸子

V 子ども問題の本棚から

深谷昌志

VI 会員談話室

<自己紹介>

宮沢長 田中菜穂子 内山絢子 小山田佳代 松井菊之

<句会むさしの>

安田勝彦 上島博 三輪ひろ美

VII イベント情報

VIII 編集後記

(ニューズレター委員会：深谷和子)